

為せば成る

KIMI ORR (旧姓 金村紀美子)



「為せば成る」

23期 KIMI ORR(旧姓 金村紀美子)



初めての大学コース

メリーランドの冬は厳しい。一月の初め頃だった。雪が凍ってしまって、車を運転するにも歩くにも危険な状態であった。まして夜になると温度が低下し、暗闇の中でのドライブは危険を伴う率が高い。John(夫)は私を学校の正門でなくしてその横の校舎のドアの前で私を下ろした。不安げに「アメリカ人と一緒に授業を受けるのは不公平だよな。」私の未熟な英語力を心配してか、それを私に言うようでもなく、独り言のようにつぶやいた。そんな私は大学のコースを受けることを決めたときから緊張していた。今、体が武者震いするほど震えている。これは覚悟の震えなのか恐怖の震えなのか定かではなかった。



校舎のドアを開けた途端、熱風がものすごい力で私に押し寄せた。外部と内部の温度の差を感じさせられた。突然のことで思わず後ろに倒れそうになるのをドアのノブをしっかりと握っていたおかげで、それを何とか免れたように思えた。校舎の中に入ってからも熱風が渦巻いていた。この熱風に打ち負かされないように、腰をかがめ、足もかがめて、中腰のような格好で、大股で足を踏みしめながら、手をしっかりと握りしめて歩いている自分に気が付いた。なんと不格好な歩き方をしているのだろうと。ただ私がこのような歩き方をしているのだろうかとまだ周りを見渡す余裕はあった。みんなはただ普通に歩いていた。そうなんだ、緊張のあまり私に噴き上ってくる熱風は、私一人で創り上げた妄想などと気が付いた。“人間は自分の想念の中で生きていく”と聞いたことがある。今、私はその真っただ中にいるようである。

私の変な歩き方に周りの人はじろじろと見降ろしているのではと、はにかみながら見渡したがそのような人も見かけなかった。何かホッと思う気分にアメリカらしくていいなと思った。

教室の中に入り、ドアから二列目の前から二番目席に陣取った。この位置なら授業にも集中できるし、授業が終わればさっさと帰ることができる見計らいからである。クラスはAccounting（会計）であった。別に経済や経営を学びたかったわけではないが。締め切りぎりぎりで申し込んだので“Accounting”だけが残っていたということであった。英語でなくてよかったと胸をなで下ろした。この科目は英語力がなくても数字が主なので何とかなるだろうと高を括っていた。また数学系は私の苦手な科目だけに余計プレッシャーを感じているのかもしれない。でも英語の科目をとるのはもっと怖かった。英語を知らないのに英語の科目をとるのは無謀なような気がした。



Community Collegeの授業は夜、大々的にあちこちの高等学校の校舎で開講されている。驚くほどの人たちが受講していた。昼間の大学に行けなかった若者たちや年老いた人たち、社会人、どの人も授業に熱心であった。アメリカの大学は簡単に入れるが勉強しないと卒業できない。当たり前のことだけど。日本では大学に入学するのは難しいが簡単に卒業できる、と言われている。学びたい人々に学べる場の門戸を広げることは社会の発展のためにも大いに役立つはず。アメリカの教育のシステムに感動せずにはおれなかった。

授業はいくつか厳しい公式が出てきた。見るからに大学ならではの教科書らしかった。いかめしく見えた公式も、少し理解すればどうってことはなかった。しかしながら授業中、教授の言っていることは全く理解できず、この教授、本当に英語をしゃやべっているのだろうかと、疑うほどだった。私には言葉ではなくて、ただ音のようにしか聞こえなかった。自分の英語の知識の欠落を、教授のしゃべる英語に問題があるのではと思うのは、私の傲慢さなのだろうか。授業が理解できるまでかなり時間がかかった。私なりにそんなことを予測して、予習に力を入れた。いつの間にか授業が復習になっていた。



Accounting のノート

授業を受ける前に理解できないところがわかつてるのでそこに集中入れて、疑問や質問があればその時間内に解決するように試みた。幸いにしてテストはペーパーテストなので、目で見る英語は聞く英語より理解しやすかった。始まって何週間かたって、テストがあった。結果が98点という点数を見たとき、「アメリカのテストは安いんや！」軽くそんな思いだった。そこに私がこんなにいい点が取れるわけがないという否定的な思いが潜んでいた。その学期末まで4回テストが行われた。最後のテストは今まで習った350ページの本のすべてだといわれた。いくら習ったからと言って、本全部とはストレスを感じさせる。でもこのテストに真剣に取り組んだ。ところが“入りと出”（収入と支出）計算の問題に出くわした時、合計が合わなければならぬのに、何回やり直しても合わなかつた。何となく不安な気持ちでテストの日がやってきた。そのページ数は7、8枚あった。50問題のうち、“入りと出”的問題は5問あった。問題を見た途端、何となくため息が漏れた。でもやらねばならぬと、問題を解き始めた結果“入りと出”的合計がすんなり合つた。うわこんなことってあるの？疑いのほうが強かった。二つ目の問題もばっちり合つた。信じられない！5問題全部“入りと出”的合計があつた時、こんなことってあるんや!!! 体が宙に浮くほど軽くなっていくのを感じた。試験の結果、思いもよらぬ点数、またもや“98点”だった！

「小さなミスだったので2点、引いたんだ。君がクラスで一番だよ」と電話の向こうで教授が言っているのが聞こえた。思わず結果に体中が熱くなるほど嬉しかつた。この教授は私をよくほめてくれた。「君はよくできるが、ほかのクラスにも君のような学生がいるんだけど、あまりできなくてね」。

「私にとって前代未聞のことである」日本で数学系でこんな点数は取つたことがない！「やはり私はアメリカに来るようになつていたんだ！」改めて自分がアメリカにいる存在感を認識した。今さらながら自分なりの勉強の仕方を知つた思いだった。42歳

だった。それ以来積極的に大学のコースにチャレンジした。“為せば成る”そんな言葉を実践したようなもんだった。そうや、やつたらできるんやと確信を得た！



終わりの言葉

上の娘が逝って一年がすぎた。ただ途方に明け暮れ、絶望に岸壁の淵に立っている思いであった。毎日泣き崩れ、何の意欲もなく呆然と過ごす私の姿を見て、Johnはこのままじゃ何もかもダメになる。学校に行くんや！と言われて無理やり“学校に放り込まれた”ようなもんだった。放り込まれた私は大学の授業を受講するほどの英語力もなく、それを拒絶することも知らないまま。言われたままに行くことが義務であるかの如く、泣き泣き2分机に向かい10分涙に明け暮れる繰り返しであった。勉強しすぎてというのか、夜中に吐き気を催し便器を抱えて苦しんだ。目眩が激しく、寝ている夫を起こし、ER (Emergency Room) (※)に連れていくように頼んだら、「明日にせ！」と怒りながらも（えみり・5歳）を起こし、車に乗せていってくれた。今まで勉強しすぎて、病気になった経験など一度もなかった。今思えばこんな時があったから今の私があるよう思う。途方に暮れて、私を学校に放り込んでくれたJohnのおかげで私は自分に“目覚めた”。彼に心から感謝している。(完)

(※) 編者注釈 ER :=緊急救命室



仲良し姉妹（撮影：1986年 12月頃）

奈緒美 5歳11ヶ月

えみり 4歳 5ヶ月

（えみり は後年英語教師として日本に数年間滞在しました）